

あしよろ・ハードサポート通信

あれだけの猛暑が続きましたが、8月に入ると雨が増え、1日の寒暖差が大きく夜は肌寒いような日が増えてきました。駆け足で夏が過ぎていくのを感じます。

今号は、先月に引き続きニュージーランド（以下NZ）の酪農の話題です。

◆ ニュージーランドの乳価



写真1：ポップなデザインの2連結集乳ローリー車

NZでは乳固形分(乳脂肪kg+乳蛋白質 kg) 1kg 当たり乳価で取引されており、訪問時の生産原価は 4.5NZドル、乳価が 6NZドル（乳量 1kg 当たりに置換えると 40円程度？）とのことでしたが、2年前の乳価は原価と同じ 4.5NZドル、3年前は 3.8NZドルまで下がり、倒産した酪農場が目立ったそうです。乳価は国際市場の影響をダイレクトに受けるので、酪農経営者たちのコスト意識や経済的な感覚は非常にシビアだと感じました。



写真2：集乳ローリー車のタッチパネルとサンプラー

写真1はフォンテラ社の集乳ローリー車です。2連結型も多く、酪農場は集乳車が入れるよう敷地を整備しなければなりません。集乳車には写真2のようにタッチパネルがついていて、前日までの乳量や、現在集乳中の生乳温度などが表示されます。その隣は生乳自動サンプラーです。

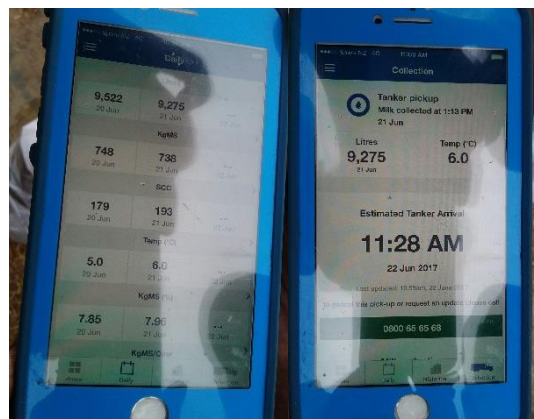


写真3：フォンテラ社アプリ 多くの情報を一目で

見づらそうですが、写真3は酪農家さんのスマホに入っていたフォンテラ社アプリです。前日までの集乳量、乳固形分量、体細胞数といった日々の生産や売上乳代に関わる情報をオンラインで簡単にチェックできます。右の画面は「今日 11:28 頃に集乳に来るでしょう」というお知らせです。

開発や運用にかなりの費用や労力が必要でしょうけれど、日本にも将来、このようなシステムが導入されたらなあと思いました。

◆ ニュージーランドの乳牛



N Zの乳牛は、ニュージーランド独自の改良を進めた白黒のホルスタイン種、乳成分が濃いジャージー種、ホル×ジャージーのF1（交雑種）の構成で、北海道に比べるととても小柄でした。

未経産牛にX精液を付けて必要な後継牛頭数を確保していく中で、ホルよりジャージーの方が小柄なため、分娩難易を意識して未経産牛にはジャージーのX精液を付けて乳用F1を生産することもよくあるそうです。後継牛の必要頭数を確保できた後は、日本と同じように肉用牛のF1生産をしている酪農家さんもありました。

写真のロータリーパーラーでは、各作業を機械化させており、搾乳牛500頭を1人で搾るのだそうです。

◆ 繁殖管理



N Zでは、放牧草の生育に合わせて春先に分娩を集中させ、時期が来たら一気に授精をスタートし、冬には全頭が乾乳牛になる、という季節繁殖の管理が一般的です。

左は哺乳用具で、黒い乳首がたくさん付いていて、子牛たちが一気に吸い付ける構造です。飲みたいだけ飲める点は良いのですが、どうやって洗浄するの…と、複雑な気持ちになりました。

季節繁殖のためには、一定の期日までに受胎させなければならないので、繁殖管理も手を抜けません。ある酪農場では週1回テイルペイントを塗り、毎朝の搾乳中にペイントや陰部の状態から発情を見つけて人工授精しているとのことで、CIDRプログラムも積極的に活用されていました。泌乳ピークでエネルギー不足のときには、そのような牛のみで群を作り、通常の2回搾乳を1回搾乳に減らしてエネルギー消費を抑え、受胎への後押しをすることもあるのだそうです。驚きました。

面積や条件、乳牛の品種、気候など、日本とは大きく異なるN Zでの放牧や飼養管理をそのまま真似るのは難しいですが、コストの安いものを採用し、うまく活用して最大の利益を得る経営感覚や、圃場と自給粗飼料への向き合い方は、わたしたちももっと意識していかなければならない部分だと思いました。機会を見つけてまた出かけてみたいです。

(久富聡子)